

本研修は1週間と短期間ではあったが、世界でも最先端といわれる機関での研究や臨床現場に直接触れることができたことはとても貴重な経験となった。さまざまな領域においてResearch側とClinical側に分かれ、それぞれが高い意識で役割を担っている理想的な組織構成にとっても感銘を受けた。また、Moseley教授のエキサイティングな講義もとても魅力的で、短期間ではあったがMolecular imagingなどスタンフォード大学の研究内容を知見でき放射線技術の将来展望などを理解することができた。

今回、個人的に初めての海外研修であり、これまでの国内研修とは大分違った感じであったが、本研修を通じて研究や臨床業務に対する意識が大きく高まったと同時に、これからは語学力が必要であることを強く認識した。

国内では、多くの学会や団体が「国際化」を推進している。日本放射線技術学会では、「国際化」の一つとして、横浜で開催される第69回総会学術大会から、電子ポスターの英語化や英語での発表を推進しており、既に語学力の必要性が高まっている。これまでも、私が知る限りでは、いくつかの海外研修や日本医学物理学会と共同での英語論文誌「Radiological Physics and Technology」の発刊、英語での特別講演を開催するなど、「国際化」に通ずる活動が行われてきた。

「国際化」を目指すことは、第一に英語(語学)力が必要であることは明らかである。今後、英語での発表が増加することを推測することは容易であるが、急激に英語化することは、学会参加者や演題登録数が減少する恐れがあることも推測できる。これからは、総会学術大会と秋季学術大会ならびに地方大会を踏まえた「国際化」のための運用がこれまで以上に重要となるのではないかと考える。また、われわれ会員としても英語での発表だけではなく、その内容について十分議論できる語学力を有することが今後とても重要ではないかと思う。

「国際化」ではなく、ただの「英語化」で終わらないように、これから日本の放射線技術の研究成果を世界へアピールするためにも、今後グローバルな視点を持って研究や業務を行うことが重要と思われる。

このように、語学力の必要性や「国際化」の重要性を意識できたという意味でも、本研修に参加した意味は非常に高いと思う。

本研修で得た経験・知識ならびにモチベーションを維持しながら、高い意識でこれからの研究や臨床業務を務めていければと思う。また、本研修では、20名の仲間(研修生)と大変貴重な出逢いをする事ができた。この貴重な繋がりを通じて、お互い刺激し合いながら、さらなるスキルアップを図り、高い放射線技術の取得とそのゴールにある患者の利益が今まで以上に高いレベルで具現化できればと考える。

最後に本研修のために多大なご尽力をいただいたスタンフォード大学、日本放射線技術学会、GEHC-Jの皆様、ならびにご引率いただきました金沢大学医薬保健研究域保健学専攻助教 田中利恵様に深く感謝申し上げます。また、快く派遣に承諾いただいた久留米大学病院画像診断センター診療放射線技師諸兄姉に心よりお礼申し上げます。



サイン入りマウスパッドを手に Moseley 教授と一緒に